09年サバ類１

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 漁獲	漁獲 産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	在庫	加工品 缶	加工品 干	加工品 蔵	加工品 節	消費支出 生(ｸﾞﾗﾑ)
20	520	449.5	70.0	133.1	1.4	10.2	4.0	3.1	0.4	100.0	25	15.2	36.2	15.8	1,321
21	471	396.0	50.8	84.1	3.4	11.7	3.1	2.6	0.4	103.3	28	21.9	49	14.4	1,372
%	91	88	73	63	243	114	77	85	90	103	109	145	135	91	104

年	価格 産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	消費支出 生(円)
20	86	244	112	356	427	495	372	525	1,166
21	73	238	89	373	354	484	494	554	1,155
%	85	98	79	105	83	98	133	106	99

漁獲と資源

２１年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、47.1万トンで前年(52万トン)を下回ったが、ほぼ近年の平均(50万トン)の水準であった。

これは、特に北部太平洋海域での漁を反映したものである。

マサバ太平洋系群の資源量は、1970年代には400万トン、1980年代前半は150万トン程度で推移したが、1980年代末に加入量の減少と強い漁獲圧により減少し近年では低水準にある。親魚量は1980年代中期の50万～60万トンから1990年代には5万～12万トンへと低下した。再生産関係（＝加入尾数／親魚量）は自然の要因により、また年代により変化するが、親魚量が45万トン以下になった1986年以降は加入量が減少すると同時に変動幅が大きく不安定になった。近年は2004年、2007年に加入量水準の高い年級群が発生し、これらの年級に支えられて資源量・親魚量ともに1990～2000年代前半の最低水準は脱しつつあると考えられる。2008年資源量は63万トン、親魚量は15万トンと評価されている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1973～1989年は88万～126万トンで比較的安定していた。1987～1990年にかけて減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は110万～137万トンの高い水準に達した。1997年以降、資源は急減し、2000～2007年は50万トン前後の低い水準に留まっていたが、2008年は73万トンに増加した。加入量は1997年以降低い値で推移しているが、2004、2008年にはやや高い値を示した。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少した。2005年に増加したが、その後は再び緩やかに減少している。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示していて、1995、2004、2008年にかなり高い値を示している。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、1995～2008年の資源量（7月時点）は、1995年以降の比較的安定した加入量の継続と1996、2004年級群の卓越した高い加入量によって300千トン前後から2004～2005年には600千トンに達する高い水準にある。2005年の632千トンのピークの後は、続く2006、2008年級群の加入量は低く、2007年級群の加入量は比較的高いものの減少し、2008年は395千トンであった。2009年の資源量は、加入量を直近の調査船調査から推定して2008年の値から前進法で推定すると452千トンといわれている。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2008年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2005年に高い値を示したが、その後は減少傾向を示している。加入量

は1992年以降、多少は変動するものの、おおむね3億尾程度の水準を保っている。近年では、2004年にやや高い値となったが、その後は減少傾向を示している。親魚量は2000～2004年にかけて減少傾向を示していたが、2004年の高い加入量のため2005年に増加した。しかし、その後は再び減少傾向を示している。発生初期の生き残りの良さの指標値になると考えられる再生産成功率は、1993、2004年に高い値を示した他は、比較的安定している。

産地水揚量と価格(継続漁港)

21年の産地水揚量は、39.6万トンで北部太平洋海域の低調さを反映し、前年（45万トン）を下回った。

価格は、水揚や輸入が減少したものの、輸出もかなり減少したことやサイズも小さく73円で前年（86円）を下回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、三陸・常磐、山陰が好調、東シナ海、東海がやや低調で、全国的には西高東低となった。道東海域では、本年も漁獲がなかった。

海域別漁獲量

海　域	20年	21年	対比(%)
道　東	0.0	0.0	#DIV/0!
三　陸	95.8	88.4	92
常　磐	142.9	80.5	56
東　海	50.8	60.0	118
薩　南	18.9	20.0	106
東ｼﾅ海	111.5	116.4	104
山　陰	26.9	35.1	131
その他	0.0	0.0	#DIV/0!
合　計	446.9	400.5	90

三陸（単位:1000トン）

月	20年	21年
1	0.3	0.0
2	0.6	0.0
3	0.2	0.0
4	0.1	0.0
5	0.0	0.0
6	0.8	2.3
7	15.2	7.0
8	24.6	15.6
9	28.2	28.6
10	14.2	20.7
11	10.4	8.8
12	1.4	5.4
計	95.8	88.4

MAX　H53　69万トン

常磐（単位:1000トン）

月	20年	21年
1	9.0	7.9
2	4.2	1.0
3	6.2	2.4
4	13.3	12.2
5	18.9	9.5
6	11.9	3.4
7	33.1	1.2
8	6.5	6.4
9	4.2	1.6
10	8.0	7.8
11	14.7	10.8
12	12.8	16.3
計	142.9	80.5

MAX　H6　14.1万トン

三　陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年を更に下回ったが、南下期には昨年並みの漁獲となり比

較的順調であった。

本年は昨年並みの８月上旬に三陸北部でスルメイカとの混獲でまき網によるマサバの初漁があり、昨年同様１１月まで漁獲がみられた。越冬期から北上期の漁獲が低調であり昨年を下回った。また本年も８月上旬からまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、昨年の約３０００トンを大きく上回る約１２０００トンの漁獲であった。

魚体は、当初はから１歳魚(2008年級群)主体であった。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、昨年同様１０、１１月に集中的に漁獲され、近年では最高の水準を記録した。

常　磐

本年の越冬サバ漁は昨年以上に低調に推移し、結局23.5千トンの漁獲で前年(32.7千トン)をかなり下回った。

また、春（５～７月期）の北上期の漁獲はで14.1千トン程度に終わり前年(63.9千トン)を大幅に下回った、南下群の漁獲は27.3千トンに終わり引続き前年（35.5千トン）をやや下回った。

なお本年も北部太平洋海域では資源回復計画に基づく休漁や時化等も多く操業はかなり制約された。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は、下期後半のみ集中したが最高の漁獲であった前年の１/３程度であった。

魚体は、周年を通じてほぼ１歳魚（2008級群）であったが、漁期後半には、一部０歳魚の混じりもみられた。

東　海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54(1978)年の17.7万トンをピークに減少しており、近年においても概ね1万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。昨年は平成年代では始めてマサバの漁獲がゴマを凌駕したが、本年はまたゴマが卓越した格好となっている。なお本年の漁獲は2,240トン（前年3,004トン）で昨年並みであった。

21年の漁獲量は、マサバが983トンで前年（711トン）を上回った。ゴマサバは1,257トン（前年2,293トン）でマサバが増加、ゴマサバはかなり減少した。

東シナ海（単位：1000トン）

月	20年	21年
1	8.9	17.1
2	2.4	6.8
3	3.4	5.8
4	0.0	4.0
5	0.0	3.7
6	2.0	2.6
7	4.1	3.4
8	6.0	6.1
9	16.2	10.2
10	18.1	13.3
11	25.4	17.6
12	21.7	25.7
計	111.5	116.4

ＭＡＸ　Ｈ８　22.2万トン

山　陰（単位：1000トン）

月	20年	21年
1	1.5	8.0
2	1.3	4.6
3	0.2	1.8
4	0.2	0.5
5	0.2	0.5
6	0.0	0.2
7	0.1	0.9
8	0.1	0.4
9	0.4	0.4
10	6.9	9.2
11	6.8	4.4
12	9.3	4.4
計	26.9	35.1

ＭＡＸ　Ｈ６　14.1万トン

東　シ　ナ　海

21年前半の年明け後の冬漁は好調に推移し水揚げも大幅に増加した。また夏場の閑漁期の漁も前年をかなり上回った。しか、9月以降本番に当たる・冬の盛漁期にはやや低調となったが、上半期の水揚げ増加もあり結果的には昨年をやや上回る水揚げにとどまった。

山　陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が九州西部同様好調に推移し、また閑漁期の夏場の漁もやや好調であった。そして秋漁以降は九州同様やや低調になり、その結果前年をやや上回った。

魚体は、2008年級群が主体であった。

輸　　入

本年の輸入量は、5.1万トンで、前年（7万トン）をかなり下回った。これは主にノルウェーからの搬入が年明け後は少なく前年集中型であり、本年物の搬入が前年同期を大幅に下回ったことを反映したものである。本年の搬入ピークは依然12月集中型になったが、近年は国産サバの安定もあって、搬入が遅くなっているのが特徴であるが、今年も結果的には輸入の搬入は少ない水準ではなかった。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーが97%とほぼ全量ノルウェーで賄っている。また、それ以外の国ではカナダ、イギリスが、それぞれ616トン（前年2,266トン）、230トン（前年101トン）、アイルランドが310トン（前年0トン）、中国が151トン（前年7,713トン）で前年大方中国からの搬入の減少が目立った。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が87%（前年：83%）主体に600ＵＰが13%（前年：17%）で、シェアでは600UPが減少し、600以下が減少している。また600ｇUPを始め日本とロシア、中国等諸外国との買値の競合関係が顕著になっている他、本年は、ノルウェーサバを巡っては特に600UPサイズでは、ロシアを始めとした国との間に買い負け現象が顕著でシェアも縮小気味である。

価格は、238円でほぼ前年（244円）並みであった。

また、中国等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年は6,471トンで前年（5,

792トン)をやや上回り、再度伸びている。

輸　出

本年の輸出量は、ここ2年間極端に多かったが8.4万トンで前年(13.3万トン)をかなり下回りやや落ち着いてきた。これは国内生産も若干落ち気味になったことも影響している。

本年はエジプトへの輸出が最も多く次いでタイ、中国、韓国となっており、順位の入れ替えが年によって激しい。また、缶詰輸出も3.4千トンと前年(1.4千トン)を大きく上回った。

在　庫　量

在庫量は、10.3万トンとほぼ前年(10万トン)並みであった。

これは、生産、輸入の減少がみられたが、前年来の越年在庫が上半期かなり多かったためである。その後下半期は、一転やや減少傾向に転じた。

消費地入荷量と価格

21年の東京消費地入荷量は、国内生産が 若干減少したものの、サイズも昨年に比べ小さいものが多くその結果生鮮が1.2万トンと前年（1万トン）を上回った。

また、冷凍は3.1千トン（前年4千トン）、塩干2.6千トン（前年3.1千トン）、塩蔵0.4千トン（前年0.4千トン）と冷凍・製品関係は何れも減少傾向が続いた。

価格は、生鮮369円（前年427円）、冷凍484円（前年495円）、塩干494円（前年372円）、塩蔵554円（前年525円）で、聖戦と原料関係は下げたが、製品は上昇した。

また、消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によっては本年もゴマサバが目立つようになり、鮮魚販売や、加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量では増加し、金額はほぼ前年並みであった。